

---

## **【企画】カッコいい戦闘シーンを書く練習**

参加者一同

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【企画】カツコいい戦闘シーンを書く練習

### 【ノード】

N5037C

### 【作者名】

参加者一同

### 【あらすじ】

なぜ、カツコいい戦闘シーンが書けないのか？

その疑問と真摯に向き合い、自分なりに練習と考察を重ねていこう。という企画です。

どうぞ戦闘シーンが苦手な方、十八番の方、向上心豊かな方、老若男女・一次、二次問わず、誰でもいらっしゃいませ。

## 覚書（前書き）

質問いたぐたびに、説明をちよつと補うておつまむ。

## 覚書

なぜ、私にはカツコの戦闘シーンが書けないのか？

「」の疑問を解消すべく、自分の書いた戦闘シーンについて練習と考察を重ねていこう、というのが、この企画の狙いです。

途中参戦OK！

ジャンル＆一次、二次問いません！ なぜなら私が一次作者だから（笑）。

ただし、一次作者さんは誰が読んでも内容を楽しめるよう、状況や攻撃方法を描写し、『技名だけで話を進める』ところは無じでお願いします。

「」の企画はあくまで『戦闘シーンを通してキャラクターを描く』ことが目的であるので、

現在、書き進めている小説の続き その戦闘描写の下書きや、既に書き終わった小説を改良するための原稿、ぱつと思ついたから書いてみただけの練習作など、

その作者さんの直接役立つような内容についてしっかり議論し、その段階を追つて投稿してこきます。

連載小説の続きもOKなのは、更新スピードをなるべく落としたくない企画主、との。のちょうどいいな作戦です（笑）。具体的例で言つと、

各章 作者名： 作品名：

第一話（第一稿目）

誰の指摘もなし。

(まえがきに登場キャラの簡単な説明、戦つ状況を。あとがきに作者の狙いや感想、反省を書きます。一言でOK。また、短編などの一話完結作品であれば、まえがき不要)

第一話（第一稿目） 指摘を受け、改稿してみたもの。

（まえがきに他の方から頂いた指摘内容を。あとがきにその指摘を受けた作者の意気込みを書きます）

第二話（第二稿目） サラに指摘を受け、改稿してみたもの。

（「れがあるかどうかはその人によります）

と言ひ感じで、この『かつこじい戦闘シーンを書く練習』という表題に投稿して行きます。

この形式を選んだ理由は、改稿経過を知ることで読み手側も「あーなるほど、これを気をつけるといふなるのかー！」とか、「この成長には、こういう気配りが必要なんだな」ってこうのと一緒に学べるんじゃないかな？と期待しているからです。

さらに指摘主を明確にすることと、皆さんに「ぜひ、この人に私も指摘されたい！」と思つような作者さんとの出会いがあるかもしれません！（ただし、その方がお忙しい場合は涙を飲んで諦めましょ。企画主ならいつでも使って構いません）

最終目標はもちろん、戦闘シーンを切り取つただけなのに、それを通して作品が掘めてしまつ内容を描くこと一です。

特に「このキャラはこうこう性格だから、こうこう攻撃はしないんじゃない？」とか、「このキャラならこう攻めて、敵を誘導する！」といった話をメインに、どんどん意見交換していきたいですね！

ちなみにこの企画では相互感想を感想欄でなくメッセージでやりとりします。

なぜなら、細かい指摘部分を指摘してくれた主さんに聞き返しやすいためです。

やはり改稿するとき、自分の欠点に対する情報を正確に掘めた方がやりやすいですからね。

さて。こんな説明で大丈夫でしょうか？

簡単に言うと、『戦闘シーン』だけを切り取つて相互感想をメッセージでやる、という企画です。

その他不明な点があれば、との。までお問い合わせください。

参加者は随時募集しております。

勿論、企画参加とまでは行かずとも、投稿した話の内容に対する感想や指摘をくださる方も募集しております！ その場合は感想欄にて、作品名と作者さんの名前を明記するよう、お願いします。

この企画では、感想・指摘について甘口・辛口を問いません！（ただし、辛口だと心が折れそう……という参加者さんは、との。にその旨を教えてくだされば、各章の作品名の後ろに【 辛口感想厳禁】という注釈を私が入れておきます）

スキルアップのために皆さん、ぜひとも率直な意見をお願いしますね。

それでは、目指せ！ 人間味溢れる『カッコいい』戦闘シーン！

！

## 覚書（後書き）

ちなみに、企画自体は一次・二次問わず進めて行きますが、企画主はセンター・オブ・チキンなので一次作品と二次作品は別々の小説として投下していきます。

## 第一稿目

銀の静寂がドームに広がっていた。

壁に囲まれた十平方メートルほどの正八面の空間。天井は抜ける  
ように高い。構成素材は壁、床、天井、いずれも堅牢な特殊鋼で造  
られており、RPGなどロケットランチャーの直撃にさえ耐える物  
だ。

乾いた静寂を微かに破る異音が一つ、響く。

イイイイイイイイイイイ

天井のライトがそれを強く照らす。十センチ程の黒い何かが空間  
のそれぞれ両端に不規則な橢円を描きながら飛び回っている。その  
羽音から生み出される歪んだ軌跡は誰にも予測は出来ないだろ？

『テストパターンバージョンスリー、ビートル1とスタッグ2の戦  
闘テストを開始する』

壁に内蔵されたスピーカーから聞こえるその声に、感情は無かつ  
た。ただ観測者としての存在のみを、その声から読み取ることしか  
出来ない。

バイオテクノロジーの急速な発展は、生物進化における、進化の  
系統樹の先頭、靈長類と肩を並べる進化のもう一つの頂点、「昆虫」  
を兵器とする技術へと変化を遂げようとしていた。

遺伝子レベルの改造による超高密度筋肉、重金属を含む強靭な外  
殻、神経系の電子改造による指向性をもつ知性化、大別されるこれ  
ら二つの技術により昆虫は本来の姿のまま、殺戮の兵器へと存在を  
シフトしていく。

この閉鎖空間はその過度期における技術実証の場　　いわゆる「  
ロシアム　　なのだ。

俺は、決闘「たたか」う、戦闘「たたか」う、死闘「たたか」  
】う、生存「たたか」う

カブトムシ型の試験型戦闘甲虫、ビートル1は思考する。

『カウント、1、2、3、スタート』

無機質な声が、人工の生存闘争の幕を開ける。

イイイイ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ　イ

羽音が急激に拡大、ビートル1とスタッグ2の姿が一瞬で焼き消えた。爆発的に発生したソニッケウェーブが縦横無尽に壁を殴打、散らばつていく。強化筋繊維によつて動く羽は戦闘甲虫の体を音速へと加速させる。

加速する一匹はおよそ人間の動体視力では見えぬ速さで、歪む橈円軌道を描いていく。やがて、二つの橈円が収束しながら、その互いの距離を縮めていった。

俺は、ヤツを倒す。戦つて、ヤツを倒す。それが俺の存在の  
証明だ。

本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。このビートル1のような明確な自我を持つタ

イプは開発者から見れば、計算外の存在だろう。  
もつともその自我の存在に気づいていればだが。

猛スピードで収束する橿円、やがて空中で派手な火花が、開花する花のように舞う。

音速の一匹がすれ違い様にぶつけ合つ重金属を含む外殻が、散つているのだ。

そろそろ、か。

ビートル1の意志がより研ぎ澄まされる。本来、ビートル1は強攻偵察兼対人戦闘型が開発目的であり、その角を生かした軍用ライフルの初速を上回る突進が最大の武器だ。

軌道の急激に変える。への字の軌跡を描き、スタッグ2の頭部正面へひたすらに飛ぶ、跳ぶ、加速「と」ぶ。

殺つた！

しかし、スタッグ2の体が一瞬、消える。

がつ！

ビートル1は左側の衝撃を感じた。

……やられたか。

左側の足一本が切断されている。突進を利用したすれ違いからのカウンターで喰らったのだ。

目前を、スタッグ2が飛ぶ。黒光りする曲線を描く顎に、ビートル1の足が一本くわえられていた。

ガチリ

閉じるアゴ、二つに千切れた足が、宙へ墜ちていく。  
クワガタムシを基本体とするスタッグ2の開発目的は強攻偵察兼施設破壊。強化されたアゴによる切断は、鉄骨さえ易々と破壊する。あくまで人を対象としたビートル1の攻撃力を遥かに凌ぐのだ。

ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、  
ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガ

チリ、

音速の羽音と共に、牙の調べが鳴り響く。

スタッグ2は食っているのだ。闘争本能を満たす存在に。

オオオオオッ！

ビートル1は加速する。例え致命的なカウンターを取られようと彼には突進以外に武器は無い。そして、闘う以外に生き方は無い。もし、ビートル1に喉があつたなら彼は叫んだだろう。  
恐怖ではなく、命を懸けて闘うこの高揚に。

この高ぶりを感じる場所が、人でいう魂の部分だという事を、ビートル1はまだ知らない。

寸前まで接近する一匹、発生する衝撃波がドームを駆け抜ける。

がつ！

またしてもカウンターを取られるビートル1、今度は右足を一本。

間髪入れず、スタッグ2の追撃。オオバサミがビートル1の胴を挟み込む。

ちいいつ！

完全な詰み、ギリギリとアゴがビートル1の胴を締め付けていく。強靭な外殻も、この状態ではしばらくも持たない。

だつたらつ！

まだ自由に動く羽を最大限に動かす。全速力で後退する。

これだ、これが……

ビートル1は思い出す。

試験後、褒美代わりに与えられる魚肉製の高蛋白ソーセージを食べている最中も彼の心は満たされることは無かつた。

闘いが終わり、移されたケージの中でも安らぎこそすれ、満たされるものは睡眠欲だけだ。

闘いが、命をかけた明日を捨て今日を生きる闘いだけが、ビートル1の捕らわれた日々を開放していく。

人はそれを「自由」と呼ぶことを、ビートル1はまだ知らなかつた。

ビートル1の頭部の角にはある改造が施してある。基部にスプリングを仕込み、遺伝子操作により体内で作りだした生体火薬で角を突き刺す、いわば生体バイルバンカーとも呼べる機構だ。

本来、すくい上げるのが目的であるカブトムシの角だが、ビートル1の加速とともに放たれる生体バイルバンカーは名実ともに超音速の槍と化す。

これを使う！

ビートル1はスタッグ2に挟まれたまま、回転をかける。スタッグ2もその動きに反応、羽を操作し、加速を増す。

グルグルとコマのように宙を回り続ける「一匹」、しかしいくら遠心力をかけようとスタッグ2のアゴはビートル1からは一向に外れない。

これでいい……

ビートル1は頭部の生体パイルバンカーを起動、誰もいない頭上へ撃ち放つ。スタッグ2の噛みついている場所は腹部であり、頭部についている角では届きさえしない。

当たり前だ、ビートル1の目的は、角でスタッグ2を突き刺す事ではない。

バズンッという生体火薬による破裂音、発生する強力な反動が一匹の回転を大きく崩す。不自然なモーメントがビートル1の延びきつた角を根元からへし折る。

当たれえッ！

崩れた回転を引きつけながら、ビートル1はスタッグ2を振り回す。歪な回転のまま、壁際へ移動。

回転の勢いを利用し、スタッグ2を横殴りに壁へ叩きつけた。グシャリという異音、スタッグ2の体があっけなく、碎けて散らばる。いかに強靭な戦闘甲虫の外殻でも、二匹分の推力とパイルバーンカーの反動でとともに壁に叩きつければ保たなかつたのだ。

……勝つた。

床へ墜ちていくスタッグの破片を見つめながら、ビートル1は生存を噛み締める。

六本の内、三本の足を失い、角さえへし折れた、もはやビートル1はカブトムシという形すらしていない。  
それでも、ビートル1は勝利し「生きてい」た。

ぐおっ！？

腹部に激痛、見るとスタッグ2の頭部がまだ噛みついている。それどころか、ギリギリと締め付けていく。

スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止める」とはない。  
死に瀕する状態にあっても、だ。

ビートル1の体が天井を手指すように上昇していく。

逃げる気は無い。そもそもそんな場所は無い。ただ、終わられるなら一番高い場所がいいと、ビートル1がなんとなく考えたからだ。

ミジリというねじられる感触の音、バツリという切断の響き、スタッグ2のアゴによつて切断されたビートル1の頭部がゆらゆらと揺れて床へ墜ちていく。

ビートル1、彼が最後に見た光景は、銀色に光輝く天井へ自らの胴体のみが雄々しく羽を広げ飛んでいく姿だった。

予想外の結果だな。

ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。  
実質はスタッグ2のデモンストレーションはずだつたんだ

がな。

しかし、ビートル1がデータに無い攻撃を自ら考えて繰り出  
すだなんて…… 実に興味深い。

ただのバグだ。こんなものは商品にならん。  
だったら、もうつていきましょう。

……はつ？

私の請け負っている次世代兵士武装実験計画。通称、「仮面「  
マスクド」ライダープラン」の中核を成す「ベルトシステム」その試  
作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

正氣か君は！？

これぐらいクレバーな闘争本能が無ければ、ライダーは作れ  
ませんよ。

ビートル1の戦いはまだ終わらない。

## 第一稿田（後書き）

- ・作者の狙いと感想  
話の思い付きのイメージとしては  
幾つもの同朋との戦いを生き抜いた実験戦闘甲虫ビートル1、彼  
の最期の闘いは最新戦闘甲虫スタッフ2との性能実験の生け贋とい  
う勝ち田の無い闘いだった……  
という感じでした。

ビートルとスタッフの対比が狙いです。

### ・反省点

話の裏テーマとしては『「自我」ってなんだ?』

というわけで、自我を持つていると第三者が確認するには「ミコ  
ニケーションを取らねばならない、しかし、ミコニケーションを  
取れない、期待されない物に報われない孤独な自我があつたとした  
ら?」

高度な演算能力と本能が合わさる時、果たして「自我」はどこか  
ら生まれるのか?

とかあつたんですが、やはり読み直してみると上手く書いてませ  
んね。

## 第一稿目（前書き）

（と。評）基本的に「読みながらその時々の感想を書く」スタイルです。

まず戦つてるのが【虫】といふことで、ぐぐつと興味を引きつけられました！

『仮面ライダー』という単語を聞いていたので、てっきり人型が戦うのかと思つたら完全に虫だ！！ みたいな。

確かに確かに！ 外殻に金属やら触角に電気端末やらつぎこんだらすっごく強そう……！ というのが第一印象。

情景描写も素晴らしい、爆発したときの光景などしっかりと頭に浮かんで来ました。

それと、最初の『正八面の空間』は、『正八角柱の空間』のことですね。

▶本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。

▶このビートル1のような明確な自我を持つタイプは開発者から見れば、計算外の存在だろう。

戦闘甲虫の知能は犬程度で、ビートル1には【自我】がある、ということはビートル1は大脳皮質が発達してより人間に近い思考をする、ってことだな。と一人納得しました。

特に、ビートル1の『 そろそろだな』などの台詞（？）も人間らしいですし、ここで、ビートル1（知能・人間） vs スラッグ2（知能・犬）と定義づけられています（私の中で）。

しかし、先にカウンター成功したのはスラッグ2。

「んん！？」 知能・犬のくせに強いな！ コイツ！

と思いながら読み進めていき（実際、野性化してゐる犬相手なら私は負ける自信ありますし（笑））

淡々としているスラッグ2のカウンター攻撃がいかにも『プログラム』っぽくて良いです！

それに引き換え、ビートル1は人間思考の闘い方のなかでも、自己啓発型の思考回路の持ち主なんだなって、この戦闘から読み取れました。

特に、最後の自分の身を犠牲にした命がけの勝負、ビートル1の「生きたい」って願いが込められているのが深かったです！ なにより、

＞スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止める』ではない。死に瀕する状態にあっても、だ。

これがね。グッときました。

やつぱりただのプログラムだけじゃなく、こうこう闘争本能の高さがいかにも虫っぽい！ と思つたんです。

しかし、最後がどうも分からぬ。

＞ 予想外の結果だな。

＞ ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。

ん？ 5%？

身体強化がスラッグ2と違つてビートル1は甘かった、つてことでしょうか。

でも確かに、スペックが低いのだとすれば頷けますね。次のセリフ。

> 私の請け負つて いる 次世代兵士武装実験計画。通称、仮面「マスクド」ライダープランの中核を成す「ベルトシステム」その試作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

たぶん、身体強化よりも知能を上げる方が技術的に難しいでしょう。

というより、『知能を上げる』＝コンピュータの処理速度を上げる、という研究者たちの発想では、ビートル1を再び創ることは難しいですね。スラッグ2が犬で、ビートル1が人なら持つてるキャパシティが全然違うことになりますから。

と、

最後まで読むとスラッグ2とビートル1の違いが、【自我の有無】だけでなく、スラッグ2は最新型だから、思考速度・身体強化にも差があつたんだろう、という結論に至りました。

しかしそうとすると、最初に「犬」と「人」という印象を与えられるだけでなく、もつと『「旧型」と「新型」のプログラム差処理スピードが全然違う』というスペック差も出した方が、よりプログラムで動くスラッグ2と、自我で考え、自分に最も合つた動きを取るビートル1の差が出せたんじゃないかな？ と思います。

## 第一稿目

ビートル1のテスト回数が十回を超えた。機能の低下にさしかかることを考へると、まともに戦闘テストが出来るのは次の一回が最後でしょう。

そうか、ならば最後の相手は最新型のスタッグ2だ。

スタッグ2ですか、最新型戦闘甲虫となると、防御性以外性能の低い前期型のビートル1の勝率は5%以下、まともな実戦テストにはならないのでは？

構わんさ、所詮は使い捨ての実験兵器だ。スタッグ2の性能を試す仮の練習台でいい。

……そうですか。

肅々とした銀の静寂がドームに広がっていた。

壁に囲まれた十平方メートルほどの、真上から見て正八角形の空間。天井は抜けるようにひたすらに高い。構成素材は壁、床、天井、いずれも堅牢な特殊鋼で造られており、RPGなど口ケットランチャーチの直撃にさえ耐える物だ。

乾いた静寂を微かに破る異音が一つ、響く。

イイイイイイイイイイイイ

天井のライトがそれを強く照らす。十センチ程の黒い何かが空間のそれぞれ両端に不規則な橈円を描きながら飛び回っている。その羽音から生み出される歪んだ軌跡は誰にも予測は出来ないだろ？

『テストパターンバージョンスリー、ビートル1とスタッグ2の戦

闘テストを開始する』

壁に内蔵されたスピーカーから聞こえるその声に、感情は無かつた。ただ観測者としての存在のみを、その声から読み取ることしか出来ない。

バイオテクノロジーの急速な発展は、生物進化における、進化の系統樹の先頭、靈長類と肩を並べる進化のもつ一つの頂点、「昆虫」を兵器とする技術へと変化を遂げようとしていた。

遺伝子レベルの改造による超高密度筋肉、重金属を含む強靭な外殻、神経系の電子改造による指向性をもつ知性化、大別されるこれら二つの技術により昆虫は本来の姿のまま、殺戮の兵器へと存在をシフトしていく。

IJの閉鎖空間はその過度期における技術実証の場　　いわゆる「ロシアム　　なのだ。

……俺は、決闘「たたか」う、戦闘「たたか」う、死闘「たたか」う、生存「たたか」う

カブトムシ型の試験型戦闘甲虫、その戦闘知生体ビートル1は思考する。

『カウント、1、2、3、スタート』

無機質な声が、人工の生存闘争の幕を開けた。

イイイイ　イイイイイイイイイイイイイイイイ

羽音が急激に拡大、ビートル1とスタッグ2の姿が一瞬で焼き消えた。爆発的に発生したソニックウェーブが縦横無尽に壁を殴打、散らばっていく。超強化筋繊維によって力強く動く羽は戦闘甲虫の体を容易に音速へと加速させる。

ひたすらに加速する一匹はおよそ人間の動体視力では見えぬ速さで、歪む橈円軌道を描いていく。

やがて、一つの橈円が収束しながら、その互いの距離を縮めていつた。

俺は、ヤツを倒す。戦つて、ヤツを倒す。それが俺の存在の証明だ。

本来、戦闘甲虫の知性は指向性を持たせるためであり、レベル的には犬程度が普通だ。このビートル1のような明確な自我を持つタップは開発者から見れば、余りにも計算外の存在だろう。もつともその自我の存在に気づいていればだが。

猛スピードで収束する橈円、やがて空中で派手な火花が、開花する花のように舞う。

音速の一匹がすれ違い様にぶつけ合つ重金属を含む強化外殻が、削れて散つているのだ。

そろそろ、か。

ビートル1の意志がより研ぎ澄まされる。本来、ビートル1は強攻偵察兼対人戦闘型が開発目的であり、その角を生かした軍用ライフルの初速を上回る突進が最大の武器だ。

軌道の急激に変える。への字の軌跡を描き、スタッグ2の頭部正面へひたすらに飛ぶ、跳ぶ、加速「と」ぶ。

殺つた！

しかし、スタッグ2の体が一瞬、消える。

がつ！

ビートル1は左側の衝撃を感じた。

……やられたか。

左側の足一本が切断されている。突進を利用したすれ違いからのカウンターを喰らつた。

後期型のスタッグ2の戦闘知性の方が、演算能力に優れているからだ。ビートル1の軌道を読み、理想的なカウンターを仕掛けられる。

目前を、スタッグ2が悠々と飛ぶ。黒光りする曲線を描く顎に、ビートル1の足が一本くわえられていた。

ガチリ、

閉じるアゴ、二つに千切れた足が、宙へ墜ちていく。

クワガタムシを基本体とするスタッグ2の開発目的は強攻偵察兼施設破壊。強化されたアゴによる切断は、細い鉄骨さえ易々と破壊する。あくまで人を対象としたビートル1の攻撃力を遥かに凌ぐ代物だ。

チリ、

ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガ

唸る音速の羽音と共に、無機質な牙の調べが鳴り響く。  
スタッグ2の戦闘知性は飢えているのだ。闘争本能を満たす存在  
に。

オオオオオッ！

ビートル1は加速する。

例え致命的なカウンターを取られようと彼には突進以外に武器は  
無い。そして、闘う以外に生き方は無い。それが今までに倒してき  
た同朋とも言える実験戦闘甲虫との死闘から学んできたことだ。

もし、ビートル1に喉があつたなら彼は叫んだだろう。  
恐怖ではなく、命を懸けて闘うこの果てしない高揚に。

この高ぶりを感じる場所が、人でいう魂の部分だという事を、ビ  
ートル1はまだ知らない。

寸前まで接近する一匹、発生する衝撃波がドームを駆け抜ける。

がっ！

またしてもカウンターを取られるビートル1、今度は右足を一本。

間髪入れず、スタッグ2の追撃。オオバサミがビートル1の胴を  
挟み込む。

ちいいつ！

完全な詰み、ギリギリと締まるアゴがビートル1の胴を締め付けていく。

強靭な外殻も、この状態ではしばらくも持たない。

だつたらつ！

まだ自由に動く羽を最大限に動かす。全速力で後退する。

これだ、これが……

ビートル1は思い出す。

試験後、褒美代わりに与えられる魚肉製の高蛋白ソーセージを食べてている最中も彼の心は満たされることは無かつた。

闘いが終わり、移されたケージの中でも安らぎにこそすれば、満たされるものは睡眠欲だけだ。

戦い以外のコミュニケーションは知らない。生死以外の意味は知らない。知る必要は無い。彼は孤独の意味さえ知らない、眞の意味の孤独者だ。

それゆえに闘いが、命をかけた明日を捨て今日を生きる闘いだけが、ビートル1の捕らわれた日々を開放していく。

人がそれを「自由」と呼ぶことを、ビートル1はまだ知らなかつた。

ビートル1の頭部の角にはある改造が施してある。基部にスプリングを仕込み、遺伝子操作により体内で作りだした生体火薬で激しく押し出した角を突き刺す、いわば生体パイルバンカーとも呼べる機構だ。

本来、すくい上げるのが目的であるカブトムシの角だが、ビート

ル1の加速とともに放たれる生体パイルバンカーは名実ともに超音速の槍と化す。

これを使う！

ビートル1はスタッグ2に挟まれたまま、回転をかける。スタッグ2もその動きに反応、羽を操作し、加速を増す。

グルグルとコマのように宙を回り続ける一匹、しかしいくら遠心力をかけようとスタッグ2のアゴはビートル1からは一向に外れない。

これでいい……

ビートル1は頭部の生体パイルバンカーを起動、誰もいない頭上、虚空へ撃ち放つ。スタッグ2の噛みついている場所は腹部であり、頭部についている角では届きさえしない。

当たり前だ、ビートル1の目的は、角でスタッグ2を突き刺す事ではない。

バズンッという生体火薬による破裂音、押し出される角から発生する強力な反動が一匹の回転を大きく崩す。不自然なモーメントがビートル1の延びきつた角を根元からへし折る。

当たれえッ！

崩れた回転を引きつけながら、ビートル1はスタッグ2を振り回す。歪な回転のまま、壁際へ移動。

回転の勢いを利用し、スタッグ2を横殴りに壁へ叩きつけた。

グシャリという異音、スタッグ2の体があつけなく、碎けて散らばる。いかに強靭な戦闘甲虫の外殻でも、一匹分の推力とパイルバンカーの反動でとともに壁に叩きつければ保たなかつたのだ。

……勝つた。

床へ墜ちていくスタッグの破片を見つめながら、ビートル1は生存を噛み締める。

六本の内、三本の足を失い、角さえへし折れた、もはやビートル1はカブトムシという形すらしていない。叩きつけた衝撃は、ビートル1の内部も確実に傷めつけていた。

それでも、ビートル1は勝利し「生きてい」た。

ぐおっ！？

腹部に激痛、見るとスタッグ2の頭部がまだ噛みついている。それどころか、ギリギリと締め付けていく。

スタッグ2もまた、闘争本能のままに闘いを止める」とはない。死に瀕する状態にあっても、だ。

ビートル1の体が天井を手指すように上昇していく。

逃げる気は無い。そもそもそんな場所は無い。

ただ、これで終わるなら一番高い場所、満天の星空の近くがいいと、ビートル1が考えたからだ。

研究室の中しか知らないビートル1が、なぜ星空を思い浮かべたのか、それはビートル1自身にもわからなかつた。

本能が囁いたのか、魂の彼方から流れ出た叫びなのか、それを知るものはいない。

ミジリというねじられる感触の音、バツリという切断の響き、スタッグ2のアゴによつて切断されたビートル1の頭部がゆらゆらと揺れて床へ墜ちていく。

ビートル1、彼が最後に見た光景は、銀色に光輝く天井へ自らの胴体のみが雄々しく羽を広げ、誇り高く飛んでいく姿だった。

予想外の結果だな。

ええ、まさか勝率5%以下のビートル1が引き分けるとは。実質はスタッグ2のデモンストレーションなはずだったんだがな。

しかし、ビートル1がデータに無い攻撃を自ら考えて繰り出しだなんて…… 実に興味深い。

ただのバグだ。こんなものは商品にならん。

だったら、もらつていきましょ。

……はつ？

私の請け負っている次世代兵士武装実験計画。通称、仮面「マスクド」ライダープランの中核を成す「ベルトシステム」その試作機の中核AIにこのビートル1の頭脳を使います。

正気か君は！？

これぐらいクレバーな闘争本能が無ければ、ライダーは作れませんよ。

ビートル1の戦いはまだ終わらない。

## 第一稿目（後書き）

- ・作者からの一言  
改稿では、指摘されたフィールドの部分や性能差などの説明部分を足してあります。（との。評より）

あとは余談ですが自我について、  
本能を核とし、知能が合わさる所に「自我」があるといつのは正直自分のそうあってほしいという理想というか、都合のいい妄想です。

昆虫類を観察していくとわかりますが、本能とは生存活動のためのいわばプログラム、自動的な行動に近いものです。

本能を骨に、知能を肉に自我が発生するなら、自我とは生存プログラムの一端にすぎないのではないか？ ならば、我々が自我と呼ぶものは生存本能の有利な機能の一部であり、自分には絶対な自我があると思うのは実は浅はかな思い込みに過ぎないのではないか？ ということなんぞまあ自分の頭ではいくら考えてもまともな答えなんぞであるはずがないので、この話では表のテーマにはできなかつたのです。W

## 第一稿目

燃え盛る炎、舐めぬくす熱。散華した瓦礫の中で俺は目覚めた。爆発のせいで、ビルの一室の窓ガラスは全て割れ、夜の街の明かりが陽炎を纏い揺れている。

「こは……ぐつ！」

両足に走る電撃のような激痛、朱にまみれた、辛うじてまだ脚の形を残す一本の肉が俺の下半身にくつづいていた。

「これじゃ、もつ空手は無理か……」

つすらとやっとそんな事を考える。冷静に考えれば脚どころか、命さえわからないのだが。

「飛田！ 生きているか！」

声と共に俺を抱き上げる人影、メガネをかけた瘦身の男。

「小木……か？」

朦朧とする意識の中、俺は十年来の親友であり、優秀な科学者でもある男、小木の名を呟く。

「しつかりしるー。こんな所で死なれちや困るんだ。お前、こはこのマスクドライダープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……ならないんだからな」

小木の片手には小さな銀のアタッシュケースがあった。

「ああ、わかつてゐぜ。約束だからな……おい！ 小木！」

小木の横腹に血のシミが大きく広がつていぐ。明らかな銃創だ。

「……へつ、ぢづつてこたあない。それより早く逃げ……」

黒い一団が俺と小木に立ちふさがる。装甲服とガスマスクを付けた死の獵犬共だ。

「こつらつー

「飛田、お前は逃げろー。」

アタッショケースを握らせ、小木が俺を窓から投げ放つ。

「小木イイツ！」

「生きろ飛田アツ！ そしてお前が、お前がステーキになるんだあツ！」

ビルから落ち行く俺が聞いた音は、友を貫く銃声。

俺が見た光景はは舞い散る友の血霧。

そして俺が抱きしめた物は復讐のための牙。

叩きつけるような足音が路地裏の壁を叩く。

それは逃げていた。生存本能のため、恐怖のため、ただ街の片隅を逃げ続けていた。

よたつきながらも、その跳躍のような移動は人の速度を越えている。

ゴミ箱を踏み砕き、生ゴミをぶちまける。邪魔なスナックの古看板を真っ二つに切断、払いのけた。

恥も外分も 隠密性も機密性もない、全てをかなぐり捨てた逃走。それほどまでにそれは焦っていた。

「　　おい、待てよ」

雑居ビルの間、突如現れた前方の人影にそれの足が止まる。

「ずいぶん怯えてんなあ……化け物の分際で人間らしくよお

蒸し暑い夜に似合う、Tシャツとジーパンのラフな格好の青年

飛田 直人　　は冷酷な、獰猛な笑いを浮かべた。

ビル街のネオンに、その姿が照らされる。

二メートルを超える背丈と細長いシルエット。逆正三角形の頭部。鎌状に延びる、高周波振動を利用した切断能力を持つ両腕。重金属を含むエメラルド色の生体装甲。

カマキリの擬人化の失敗作としか表現出来ない外見。中途半端に人間に近い様が嫌悪感をより引き立てる。

「オマエハ……ナンダ！？ ナゼワレラ『クーゲルシュライバー』  
ネラウ！」

その声は辛うじて人の言葉を話した。

「『なぜ』か……？」

飛田の掲げられた右手には一十センチ程の筒状の物体。対物ライフルの弾丸のような物があった。

「決まつてんだろ……『復讐』だ！」

ビルからの落下から田覚めた時、飛田の前に一人の男がいた。

「おやおや、もう田覚めましたか。お丈夫ですねえ」

「ニヤニヤと全てを嘲笑うように、笑顔を浮かべるその男は小木の協力者の一荒と名乗った。

飛田の脚はすでにサイバネティクス手術により機械の義足が取り付けられている。マスクドライダー一号機のセッティングも飛田用に済ませてあるといつ。まるで悪魔の如き手の回し用。

「さて、お膳立てはすみましたので、肝心のあなたはいかがなさいますか？」

イヤミのように皮肉気に一荒が問う。飛田は迷う事無く、復讐を選んだ。

「出番だ、ビートル1ツ！ 貫くぜ！」

めぐり上げたTシャツの下にベルトのバックルが覗く。電子的紋様で刻まれるレリーフは、抽象化されたカブトムシの姿。勢いよく、手に持つ筒 チヂリウム起爆用小型パイルバンカーを装着する。

カチリという小さな響きの後に、巨大な破裂音が唸る。濃縮チヂリウムの活性化した青い熒光が飛田を包み込む。

『チヂリウムエナジー制御、装甲展開開始』

ビートル1の音声 精神疲労を和らげやすいとされる柔らかな女性の声 が告げる。

光に包まれた飛田、その身が装甲に覆われていく。

光が晴れたその中に立っていた者は、黒い装甲に、血脉の様に引かれる赤のライン。額には、甲虫を想起させる小型の角。複眼状の正六角型パターンの入ったゴーグル。

夜の街に、復讐の魔人が現れる。

「キイヤッー！」

咆哮を上げ、カマキリの怪人が両手を振るつ。空中を不可視の斬撃波が疾駆する。

「セイツッ！」

それよりも速く、魔人は地を蹴る。斬撃波は魔人のいた背後の壁を切り裂くだけだ。

「ビートルー、ファイナルドライブセット、レディー！」

『チャージはもうやっている！ カウント、ワン！』

路地裏の狭い夜空に魔人が高く舞う。鈍く輝く三日月を背に、力マキリ目掛け落下。ベルトから左膝へ、青白い光が血液のように集つていく。

「気が効くなお前は！」

『集中しろ飛田、ツー！』

神の鉄槌の如く、左膝頭がカマキリの頭部に叩きつけられた刹那、

『スリー！ イグニッシュョン！』

「ファイナルステーケツッ！…」

左膝が爆発音と共に眩い光を放つ。膝頭内部から、義足の膝部の内部骨格である金属支柱 パイルバンカー が撃ち出された。

魔人の持つ最強の牙は瞬く間にカマキリの頭部を貫き、吹き飛ばしていく。

その直後、カマキリ体内の証拠抹消機能 つまり自爆装置が起動した。

「けつ、毎度派手に吹つ飛びやがる」

『出なければ証拠抹消機能の意味が無い』

爆発の中、無傷の魔人が立ち尽くす。

「俺が『何か』か、冥土の土産に教えてやるよカマキリ野郎」

それは、貫く者。それは、復讐者。それは挑戦者。汝、その名は

「仮面ライダー　ステークだ」

飛田　直人とビートル1の戦いはここから始まる。

## 第一稿目（後書き）

### ・作者の狙いと感想

深夜テンションで書いたもので、「もっと読みたい！」と思つて  
もらえりや狙い通りです。続<sup>きは</sup>……無理かなW  
とりあえず戦闘描写については特に不足無く伝わったようだと安  
心しました。（企画主の感想を受けて）  
複雑な動きとかさせてると「これ読む人にちゃんと伝わるかな？」  
とスゴい不安ですからW

## 第一稿田（前書き）

（との。評）

今日はあれですね。

すごくヒーローものって感じがします！

『復讐』を掲げる飛田さんですが、あまり『憎悪』の感情には捕われていよいようですしどこかカラリと爽やかな、熱い男を見せて貰つた気がしました！

以下はちょっとだけ、読んでいる間に思つたことです。

♪「しつかりしろ！ こんな所で死なれちゃ困るんだ。お前、にはこのマスクドライダープラン一号機を着けて……もうわなくしゃ……ならないんだからな」

この小木さんが弱つていく感じがセリフで伝わって来る、というのが個人的に印象的でした。そこで、地の文でも、小木さんが弱つてる描写を付けたしてはいかがでしょう？

こう、もうろくとした意識の中、飛田さんが『徐々に』状況を把握するつて感じで。

そしてまた相変わらず、戦闘描写、情景描写が巧みですね！  
辛口が、出来ない……！（笑）。

ただ、今回は『予告編』という感じで、キャラの深いところまで描写、とは行かなかつたように思います。

でも、だからこそ『復讐』を掲げていながらそれに捕われていな、カラリとした主人公、といつイメージが印象に残りますね。

強いて言つならば、前作のビートルーと飛田さんはどうこう相性なんだろう？と思ひます。

やっぱり、二人とも『突進・直感・自分の能力にあつた動きで戦うコンビ』ってことでしょうか？

一人の勘（個性）が噛み合わないと悲惨な結果になりそうですが、今回のカマキリーは第一話でやられる敵キャラ（イメージ）のことで、この一人のコンビの絆を書くには力不足のようです。だからこそ、第二話が欲しいな！なんて思いましたw

飛田さんはどういう感じのライダーになるのかなあ？なんて妄想が書きたてられますね！

## 第一稿目

燃え盛る炎、舐めぬくす熱。散華した瓦礫の中で俺は目覚めた。爆発のせいで、ビルの一室の窓ガラスは全て割れ、夜の街の明かりが陽炎を纏い揺れている。

「……ぐつ！」

両足に走る電撃のような激痛、朱にまみれた、辛うじてまだ脚の形を残す一本の肉が俺の下半身にくつづいていた。

「れじや、もう空手は無理か……」

つすらとやつとそんな事を考える。冷静に考えれば脚どころか、命さえわからないのだが。

「飛田！ 生きているか！」

声と共に俺を抱き上げる人影、メガネをかけた瘦身の男。

「小木……か？」

朦朧とする意識の中、俺は十年来の親友であり、優秀な科学者でもある男、小木の名を呟く。

「しつかりしるー。こんな所で死なれちや困るんだ。お前、こはこのマスクドライダープラン一号機を着けて……もらわなくちゃ……ならないんだから……な」

小木の片手には小さな銀のアタッショケースがあった。それを掴む小木の手が血に濡れている。やがてゆっくりと指から力が抜けていった。

「ああ、わかつてゐるぜ。約束だからな……おい！ 小木！」

小木の横腹に血のシミが大きく広がっていく。明らかな銃創だ。

「……へつ、ビツツてこたあない。それより早く逃げ……」

黒い一団が俺と小木に立ちふさがる。装甲服とガスマスクを付けた、小銃の牙を持つ死の獵犬共だ。

「いいつらつ！」

「飛田、お前は逃げろ！」

アタッショケースを握らせ、小木が俺を窓から投げ放つ。

「小木イイツ！」

「生きろ飛田アツ！ そしてお前が、お前がステーキになるんだあツ！」

ビルから落ち行く俺が聞いた音は、友を貫く銃声。

俺が見た光景はは舞い散る友の血霧。

そして俺が抱きしめた物は復讐のための牙。

二年後

関東地方都市、○市郊外

叩きつけるような足音が路地裏の壁を叩く。  
それは逃げていた。生存本能のため、恐怖のため、ただ街の片隅  
を逃げ続けていた。  
よたつきながらも、その跳躍のような移動は人の速度を越えてい  
る。

「ゴミ箱を踏み碎き、生ゴミをぶちまける。邪魔なスナックの古看  
板を真っ二つに切断、払いのけた。

恥も外分も　　隠密性も機密性もない、全てをかなぐり捨て  
た逃走。それほどまでにそれは焦っていた。

「　　おい、待てよ」

雑居ビルの間、突如現れた前方の人影にその足が止まる。

「ずいぶん怯えてんなあ……化け物の分際で人間らしくよお」

蒸し暑い夜に似合う、Tシャツとジーパンのラフな格好の青年

飛田　直人　　は冷酷な、獰猛な笑いを浮かべた。

ビル街のネオンに、その姿が照らされる。

二メートルを超える背丈と細長いシルエット。逆正三角形の頭部。  
鎌状に延びる、高周波振動を利用した切断能力を持つ両腕。重金属  
を含むエメラルド色の生体装甲。

カマキリの擬人化の失敗作としか表現出来ない外見。中途半端に

人間に近い様が嫌悪感をより引き立てる。

「才前ハ……何ダ！？ ナゼ我ラ『クーゲルシュライバー』ヲ狙ウ！」

その声は辛うじて人の言葉を話した。

「『なぜ』か……？」

飛田の掲げられた右手には二十センチ程の筒状の物体。対物ライフルの弾丸のような物があった。

「決まつてんだろ……『復讐』だ！」

ビルからの落下から目覚めた時、飛田の前に一人の男がいた。

「おやおや、もひ田覚めましたか。お丈夫ですねえ」

「ヤーヤと全てを嘲笑つよひ、笑顔を浮かべるその男は小木の協力者の一荒と名乗った。

飛田の脚はすでにサイバネティクス手術により機械の義足が取り付けられている。マスクドライダー一号機のセッティングも飛田用に済ませてあるといつ。まるで悪魔の如き手の回し用。

「さて、お膳立てはすみましたので、肝心のあなたはいかがなさいますか？」

イヤミのように皮肉気に一荒が問う。飛田は迷う事無く、復讐を選んだ。

「出番だ、ビートル1ツ！ 貫くぜ！」

めぐり上げたTシャツの下にベルトのバックルが覗く。電子的紋様で刻まれるレリーフは、抽象化されたカブトムシの姿。勢いよく、手を持つ筒 チヂリウム起爆用小型パイルバンカーを装着する。

力チリという小さな響きの後に、巨大な破裂音が唸る。濃縮チヂリウムの活性化した青い熒光が飛田を包み込む。

『チヂリウムエナジー制御、装甲展開開始』

ビートル1の音声 精神疲労を和らげやすいとされる柔らかな女性の声 が告げる。

光に包まれた飛田、その身が装甲に覆われていく。

光が晴れたその中に立っていた者は、黒い装甲に、血脉の様に引かれる赤のライン。額には、甲虫を想起させる小型の角。複眼状の正六角型パターンの入ったゴーグル。

夜の街に、復讐の魔人が現れる。

「キイヤッ！－」

咆哮を上げ、カマキリの怪人が両手を振るつ。空中を不可視の斬

撃波が疾駆する。

「セイツッ！」

それよりも速く、魔人は地を蹴る。斬撃波は魔人のいた背後の壁を切り裂くだけだ。

「ビートルー、ファイナルドライブセット、レディ！」

『チャージはもうやっている！ カウント、ワン！』

路地裏の狭い夜空に魔人が高く舞う。鈍く輝く三日月を背に、カマキリ目掛け落下。ベルトから左膝へ、青白い光が血液のように集つていく。

「気が効くなお前は！」

『集中しろ飛田、ツー！』

神の鉄槌の如く、左膝頭がカマキリの頭部に叩きつけられた刹那、

『スリー！ イグニッショーン！』

『ファイナルステークツッ！！』

左膝が爆発音と共に眩い光を放つ。膝頭内部から、義足の膝部の内部骨格である金属支柱の槍　　パイルバンカー　　が撃ち出された。

魔人の持つ最強の牙は瞬く間にカマキリの頭部を貫き、吹き飛ばしていく。

その直後、カマキリ体内の証拠抹消機能 つまり自爆装置が起動した。

「けつ、毎度派手に吹っ飛びやがる」

『出なければ証拠抹消機能の意味が無い』

爆発の中、無傷の魔人が立ち尽くす。

「俺が『何か』か、冥土の土産に教えてやるよカマキリ野郎」

それは、貫く者。それは、復讐者。それは挑戦者。汝、その名は、

「仮面ライダー ステークだ」

飛田 直人とビートル1の戦いはここから始まる。

## 第一稿目（後書き）

- ・作者からの一言  
正直、この掲示板競作企画。『バイルバンカー』『仮面ライダー』ステークはあまり手を加えてません。小木の負傷の描写を強めたぐらいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5037u/>

---

【企画】カッコいい戦闘シーンを書く練習

2011年9月25日03時27分発行